

令和2年度仁科台中学校の経営ビジョン

教育理念：聴く学校

学校は、生徒たちが学び合い育ち合うことを専門家である教師が保証する空間です。そこでは、お互いが、かけがえのない大事な存在であることを認め合うことが重要です。

そのために、「聴く」ことが基本であると考えます。

「聴く」とは、「耳を傾け、相手の心に寄り添いながら聴く」「相手の気持ちやその背景をも理解しようと心から共感する姿勢で相手の言葉を聴く」ことです。この「傾聴」は、音や言語を情報として耳に入れる「聞く」よりも、相手とつながろうとする意志をもつものです。

教師は、これまでともすれば、生徒を条件付けで、あるいは部分的に評価することに陥りやすく、そのことが生徒と教師の距離を遠ざけていた要因になっていたように思います。生徒が安心して教師とともに学び続けるためには、教師が「目の前の生徒を丸ごと受け止め、生徒のよさをその生徒の全体としてとらえ、生徒に伝えていく」ことが求められます。このような教師の「傾聴」と「愛語」による姿は生徒間の関係づくりのモデルとなり、生徒は生産的な関係の中で自己有用感を育み、学ぶ意欲を高めていくことでしょう。

生徒と教師がともに学ぶ学校という空間を、「傾聴」と「愛語」を基本としたお互いが居心地のいい空間にしたいのです。

目指す学校像：学校づくりの根幹を「授業づくり」に置く学校

自己有用感を育み、学ぶ意欲をもった生徒は「自律した学習者」になることが期待されます。それは、自己との対話（振り返り）によって自分の行動を律することができる生徒の姿です。

「自己調整学習力」を高めるには、学びの節目で振り返る場を設定し、生徒が自己との対話により、自らの学びの成果と課題を明らかにしたり、次の学習を見通したりする経験が重要になります。学期というスパンでいえば「学期はじめと学期末」であり、一時間の授業であれば「導入・展開・まとめ」となります。生徒が1日の大半を学校で過ごし、そのほとんどは授業であることから、自律した学習者を育てる主たる場は授業となります。その意味で学校づくりの根幹は授業づくりであるといえます。

そこで、全教科・領域で「ともに学ぶ対話を基盤とした授業」を取り入れます。この授業では自己との対話、つまり、振り返りが連続して行われることが期待できます。そこでは、自分の考えと違う考えを持つ友との対話を通して、自分の解決策を見つめ直したり、更によりよい考えや方法を創り出したりしていく深い学びが発現します。そしてその深い学びにより「筋道立てて考え、適切に伝える力」、つまり「論理的思考力」が養われます。一方で、生徒が自己調整学習力を発揮して論理的思考力を高める授業では、対話の質が問題となるのです。

今年度は、自己調整学習力を高めるために、学習評価システムについて研究し、総合的な学習の時間を核とした教科等横断的なカリキュラムを編成し、キャリア・パスポート、スケジュール帳を活用します。また、教科等横断的なカリキュラムの内容を地域と共有し、生徒への支援を協働するために、新しく導入される学校運営協議会制度に基づく学校のあり方について合同研修を企画します。さらに、職員が本校における使命と課題を明らかにするミッション探索カードを活用し、「傾聴」と「愛語」により生徒の学習意欲を高める教師を目指したいと思います。

これらの取組から、「聴く学校」を合言葉とする学校づくりと生徒がともに学ぶ対話を基盤とした授業づくりを通して、自己調整学習力を高め、自律した学習者を育成します。

仁科台中学校長 興 幸雄